

製造工業に於ける原價計算制度の地位

根 岸 正 一

製造工業の經營には種々緊要なる問題が存するがエムスリーは特に其の重要なるものとして次の三項目を掲げ
 註一
 る。

一 企業的一般財政 二 製造又は加工の實際 三 販 賣

之である。氏の數ふる右三種の項目は各々企業經營上重大なる要素を包藏し、従つて又是が綜合的研究は製造工業の經營に缺ぐべからざる知識を授くるものである。而して茲に論せんと欲する原價計算制度なるものは前掲第二の項目即ち製造又は加工の實際に關する諸問題に直接關し、同時に又此等三者全體に對し共通的のある根據を授くるものなるに於て特に顯著なる重要性を帯ぶるものである。蓋し第二の製造又は加工の實際に關する項目は

- (a) 製造又は加工に關する技術上の諸問題
 (b) 製造又は加工に關する經營上の諸問題

に大別する事を得、製品の圖案並に設計、原材料の鑑定並に選擇、原材料の配合、製品の検査等は其の前者に屬する。而して工場組織殊に製造組織の設定、原材料の購入並に調達、其の配給、作業の企劃、職工並に従業者の管理等は其の後者に屬するものである。製造又は加工の進行に應じ或は製品完成の曉に於て製造又は加工に關し發生せる諸經費の積生を調査整理し、目的に應じて諸種の計算的資料を調達する原價計算制度は彼の純然たる製造又は加工の技術に關するものと稱せんよりは寧ろ其の經營上の問題に屬すべきものと論定すべきである。而も之に依つて第三の販賣に關する基礎的標準を得、之に據つて又第一の一般財政に重要なる基本を得るものである。

製造工業に於ける競争なるものが激甚でなく、又製造技術が其の進歩の途上にあつて、其の技術の改良進歩が獨り工業の企業収益を決定する要件をなしたる時代には製造加工に關する技術的諸問題が獨り研究の重要性を持ち、經營の良否は唯だ技術の良否を以て決せらるゝの傾向があつた。されど技術の進歩が或種の限界に達し、又優良技術の普及が著しく、且つ同業者間に於ける競争が激甚の程度を加ふるに従つて技術を離れて製造組織の決定、原材料の購入配給、職工能率の管理の如き、更に進んで特化集中等の經營的諸問題が工的企業の死活を支配するの情勢を誘ひ起すのである。同時に其の根本に横たはる製造の原價、換言すれば材料費、工賃、機械器具の償却費、保險料、租税等直接に間接に製造又は加工に伴ひ生ずる一切の經費の算定、又其の算定に基く製品一個又は一單位に賦課すべき合理的金額の算定、或は經費發生の原因的現象の整理研究は臆がて激烈なる競争場裡に於ける製造工業の經營乃至支配に自信ある資料を提供することとなる。又之に依つて經費發生の原因的現象の

調節を可能ならしめ、更に此の調節的見地より組織を改め或は管理方式を改善する動機と目安とを獲るを得せしむるものと觀るべきである。

註 1 H. H. Emsley, Factory Costing, P. 1.

二

所謂工場管理なるものは一面に製造技術を進め他面に設備並に勞力を最善有効に利用し、又原料材料其の他の諸經費を切詰めて、製造又は加工の總べての方面に亘つて能率の發揮に努むる事を以て其の要諦となすものである。製造技術を練磨する爲めに原價計算制度の上ぐる利益は或は論ずるに足らないであらう。併し原料材料の節約を旨とし、製品產出量の向上を圖り、或は同一品質分量の原料材料を使用して従前より一層良好なる生産をなさんとし、或は如何なる原料材料又は設備を利用するを以て一層有利なる生産をなし得るや、此等一切の研究の根柢には精密なる原價計算制度の要用なる論を疎たない。^{註一}而して又其の製造技術の巧妙極致に達し其の之を工場に實際に施すに當りて常に豫定の計畫を以て豫定の結果を擧げ、又原料材料節約の實績を擧げ得たりや否やを實地に徴するに當りては又原價計算制度の力に俟たざるを得ないのである。又直接には製造技術を離れ單に原料材料の亡逸を防ぐ管理方面の立脚地より觀るも、精密正確なる原價計算制度の存在して其の庫出及び利用につき周到なる記録或は計算を得ることは最も要用の事に屬する。

労働費用の節約は工場管理の眼目として特に重きを加へて居るが、此の労働費用の節約なるものは勿論各個の労働に對し賃銀の最低を支拂ふべしと云ふ意味ではない。却つて個人に支拂ふ賃銀を出來得る限り引上げて割合以上に能率の向上を圖らんと欲する處に重點があるのである。^{註三}無効無意義の賃銀支拂を防ぎ一方に生産分量を増し、結局製品一單位當りの賃銀額を低下して行くの結果を舉げんと欲するのが眼目である。而して之が爲めには又精密なる原價計算制度の存するあつて其の觀測乃至計算に十二分の資料を供しなくてはならぬ。燈火、燃料、瓦斯、蒸氣、機械設備の減價償却、保険料其他諸雜費等の *Overhead* に屬する諸經費の觀測並に其の節約に關する管理は原料工賃等所謂製造直接費用と異なり、其の之を製品一單位に賦課して正確を期し、且つ其の節約の研究を試むる事の一層必要にして且つ困難なるは明白なる事實である。之が爲めに正確巧妙なる原價計算制度の必要なる又一層明白なる事實であると稱し得る。^{註四}

^{註五}總ての工業すべての工場に最も好適なりと認め得らるゝ原價計算制度は始めより普遍的に嚴存するものではない。此等は各々の工業に就き各々の工場につき最も好適なるやうそれぞれ工夫研究を施す事を必要とする。此の意味に於て工場に於て行はるゝ實際作業並に其の管理的諸要件に深き知識を有するものにあざれば原價計算制度の立案並に其の活用は至極困難なる事に屬する。又之を他の一面より論ずるときは原價計算制度に關する知識に通達之士にあざれば工場に於ける實際作業の管理並に其の管理方法の改善は不可能の事に屬すると稱し得る。工場管理と原價計算制度とは車の兩輪をなすもので何れか其の一方を缺きて尙他の一方を以て克く其の功を收め

んと欲するは至難の事である。

註一 Clinton H. Scovell, Cost Accounting and Burden Application, p. 2.

註三 拙著工場管理概論 第五頁―第六頁

H. Julius Luntz, Manual of Cost Accounts, p. 2.

註四 Luntz, Manual of Cost Accounts, P. 3.

註五 Paul M. Atkins, Industrial Cost Accounting for Executives, p. 2.

三

企業の經營に於て Control Mechanism の一つとして近來特に注意を拂はるゝに至つたものは此の原價計算の制度である。現今の企業殊に製造工業に於ては市場の要求に應じ或は生産費用軽減の爲めに大量生産を必要となし來り、企業の組織は大規模化せられ、其の趨勢は日を追ふて益々旺なるの觀を致して居る。而して人類生活の向上人類欲求の限りなき進展は製品の種目、品質並に分量の上に多大の増加及進歩を來たし、前掲製造規模の擴大の外に製品種目の複雑化を齎した。更に又此等事項が其の素因となつて製造技術の上に諸種の發見發明を誘發し、極端なる製法の複雑化をも來たしたのである。製造工業の未だ發達の域に達せざりし時代には規模概ね狭小であつて、技術は又簡易なる範圍を出でなかつた。之が經營乃至管理の任にある者は餘り多くを勞せずして内部組織の一斑と其の組織の運行に伴ひ生ずる成果とを克く考量する事を得たのである。されど上述の如く組織の擴大と

製品種目、品質、分量、製法の向上乃至複雑化は經營者又は管理者をして最早容易に其の内部組織と其の運行に伴ひ生ずる經濟的事象殊に製造に關する計理的諸事項を推知する事を得せしめざるに至つたのである。即ち一般的會計々理の外に特に製造原價に關する精密なる計算制度の必要を見るに至つた譯である。^{註六}製造組織の進化、製品種目並に製造方法の複雑化と原價計算制度との關係は斯くて益々其の重きを加へる。

註六 W. B. Lawrence, Cost Accounting, pp. 2-3.

Atkins, Industrial Cost Accounting for Executives, pp. 1-2.

E. W. Newman, Theory and Practice of Costing, p. 2.

現今の如く工場組織大規模となり、製品の種目分量共に加はり複雑化を來すときは、工場經營の爲めに投下せらるゝ資本は必然的に増大するを免れない。否之を増大する事に因つて克く其の成果を擧げ得るものと云ひ得る。經營費用の如きも之を小經營時代に比較すれば割合的には尙輕少なりと云ひ得べけんも、若し之を放漫に經營せんか經營費用の著しく擴増するは免れない傾向である。加ふるに製品販賣上に於ける競争の激増は製品賣價の上にも必然的に制限を加へ來り、自工場に於ける生産費用の計算を以て賣價算定の基礎となすを許されず、却つて市場に於ける一般市價が自工場に於ける生産費用の上に掣肘を加へ來つて、如何にして市價に適應せる生産をなし得べきやの研究を必要とし來るのである。^{註七}而して其の市價に對する自工場を生産費の關係、従つて又生産費節約の餘地の研究等凡そ經營上の採算と原價計算制度との關係は益々密接の度を加へるのである。

製造工業に於ける原價計算制度の地位

前項に述べたるが如く企業の大經營化は一面に經營費用の割合的輕減を齎し得べきも、放漫なる經營は大規模なるに於て却つて經營費用の老大を來す虞がある。従つて工場の經營或は管理の任にある者は先づ

一 大經營に伴ひ擴大又は膨脹したる工場内部の計算が——殊に製造又は加工に關する一切の計算が——如何に進行しつゝあるやを知らなければならぬ。

二 自工場に於ける生産費用が工場の維持費用と共に市價又はそれ以下の價格に依る製品販賣によつて恢復せられ、幾何の餘剰を残すべきや其の計算を知らなければならぬ。

三 次第に加重し來る販賣上の競争殊に賣價の切下げに應ずる生産費用の節約は之を合理的に如何なる諸點に求むべきや。

を精察しなければならぬ。而かも其の精察の基礎をなし其の精察を帮けて更に將來に處する方針を指示するものは、獨り工場内部に於ける諸計算殊に製造に關する計算としての原價計算制度の齎す結果に外ならないのである。

工場經營に於て經費節約の問題は至難にして且つ最も緊要なる事象に屬する。註八能率の進展を目標とする工場管

理の要諦は設備は勿論のこと、努力、原料、その他直接間接に製造に要する諸費用を最も合理的に且つ經濟的に切詰めて行くにある。而して經費の問題は其の支出管理は勿論其の計算記録に格段の施設をなすにあらざれば動もすれば無意義に膨脹し來る傾向を持つものであつて、先づ周到綿密なる計算記録の施設に依りて常に其の計算の觀測を怠らざる事を必要とする。註九而して其の施設を以て啻に其の計算の觀測手段たるに止めず、更に一步を進め

て現に費消されつゝある経費が克く最大の効果を擧げつゝありや否やを觀測するの手段にも供すべく、又更に一步を進めては現に費消されつゝある経費が如何により一層有効なるを得べきや、或は那邊に其の切詰めの可能性存するやを明かにする手段にも供すべきである。

斯くて原價計算制度は経費節約の管理に至大最高の資料を提供する事となる。勿論之が爲めには其の原價計算制度を周到巧妙にして好く其の目的に合致するやう特に考案を施すことを必要とするであらう。經營節約の管理に當りては管理者は先づ経費の豫算書を用意しなくてはならぬ。而して其の豫算書なるものは其の支出金額に於て最少であつて、其の目的達成の上に於ては最大の効果を擧ぐるもの所謂標準的のものでなくてはならぬ。而して其の標準を得る爲めには先づ決問題として或は前提的要件として工場設備並に作業法式は勿論、作業の順序立、作業の割當等、換言すれば作業の企劃を最も能率的に標準化しなくてはならぬ事は勿論である。^{註一〇}斯かる基礎の上に製造の進行に伴ひ刻々に發生する實際の計算を明確に看取し計算し或は綜合し分析し、以て豫算に照して標準に對する實際の成績が如何に展開したりやの成行きを明かにすべきである。又同時に標準に照して實際の成績が進歩又は退歩の事象を示したる時は其の原因の把握抽出に努めなくてはならぬ。此等は一つに精密なる原價計算の力に俟つべく、原價計算制度の確立するありて始めて克く其の目的を達し得るものと云ふべきである。^{註一一}經費の支出管理と原價計算制度との關係は斯くて著しく密接の度を加へる。

註一〇 George E. Armstrong, *Essentials of Industrial Costing*, pp. 25-26.

製造工業に於ける原價計算制度の地位

註八 拙著工場管理概論第二頁—第三頁

註九 A. Hamilton Church, Manufacturing Costs and Accounts, p. 431.

註一〇 拙著工場管理概論 第十三頁—第十八頁

註一一 Anthony B. Manning, Elements of Cost Accounting, pp. 2—4.

工場経営に當りて又特に注意を要すべきは工場に各種の製造部門存するとき此等が互に擧げつゝある利益又は損失の比較研究である。工場に於て數種又はそれ以上の互に異なりたる製造部門存するとき此等各部門は一齊に同一の成績を擧ぐるものとは限らない。時に一部門は異常の好成績を收め、他の幾多の部門は却つて損失に陥りつゝ尙且つ工場全體としての計算は利益の獲得に傾いて居る場合があり得る。之を工場の大局より觀るときは一部門の擧げたる利益が他の部門の穿ちたる穴を埋めて餘裕を残し、結局表面的には各部門の繁榮を想はしむるのである。されど經營又は管理の任にある者は其の間の事情を些の誤謬なく省察して部門と部門との比較研究を行ふは勿論、繁榮に赴きつゝある部門と然らざる部門との鑑別並に其の因つて生ずる事情の根柢を正確明瞭に把握するに努めなくてはならぬ。而して之が爲めには各部門別に精細なる原價計算を行ふべく、其の計算の示す處に基いて或は損失部門の閉鎖を圖り、或は其の閉鎖困難なる事情存するときは如何にして之が恢復の途を求むべきやを研究し、或は又如何にして其の損失を出來得る限り最少限度に輕減すべきやを攻究する事を必要とする。時に損失部門製品の製造註文を引受くるに當りて必ずのやうに利益部門製品の製造註文をも併せ受くる勸誘に努む

註一二

るの心懸けを要すべく、又他方に於て折角利益を擧げつゝある部門の成績を如何にして更に一層之を進展せしむべきか、或は少くとも其の成績の維持に如何なる努力を拂ふべきかの研究を怠らざる事を必要とする。殊に他の部門に於て醸されつゝある損失を此の部門の利益を以て補填せんと欲する營業政策に出づる場合に更に此努力と研究とが一層必要となり來るのである。部門別利益の測定と原價計算制度とは斯くて一層の重きを加へるのである。

各製造部門の擧ぐる損益を考量し、秀でたる部門を進め劣りたる部門を適當に處理する爲めの所謂 Profitable Mine の觀測は前項に述べたる通りであるが、茲に今一つ之に類似したる事項であつて原價計算制度の力に俟たざるべからざるものが存する。即ち一製造部門或は數製造部門に亘つて其の製造又は加工の工程を改め、或は製造又は加工に使用する機械其の他設備の改廢變更又は取替を行はんと欲するとき、其の可否を決定する爲めに之を技術者の回答にまつときは常に其の改廢を有力に主張せらるゝ場合にも、尙且つ原價計算の結果に徴して經營上却つて改廢を行はざるを可とする場合が存在し得る。技術者が單に製造技術の難易より設備或は製法の改廢を要求するは又當然の事象に屬するけれども、經營又は管理の任にある者が之が爲めに經營全般の採算を没却する事は許されないものである。技術者が據つて以て改廢又は取替を是とする場合にも、其れが原價計算の結果改廢後に於ける計算の見積が改廢前の現狀に照し採算上成績の及ばざるが如き場合には其の改廢又は取替は不用意に決行すべきものでない。又他方に技術者が據つて以て改廢取替の要なしとする場合にも其の改廢又は取替後の見積が現狀維持に遙かに優る場合には、其の改廢取替に關し必然的に伴ひ發生すべき一時的利害を没却して其の改廢

變更を斷行すべきものである。之を要するに經營の大局より觀て最も合理的或は是なりとする改廢變更は技術上の諸關係と原價計算上の諸關係との詰合調和に由つて決定せらるべきものである。此の意味に於て設備或は製造方式の改廢と原價計算制度とは深甚なる關係を有するものである。

註一一 W. H. Hazell, Costing for Manufacturers. p. 40.

Atkins, Industrial Cost Accounting for Executives. P. 6.

四

製造工業に従事するものが其の製品の賣價を算定するに當りては他の條件を度外に置いて論ずるならば、工場に於ける製造原價の上に適當なる利益率を加へて決すべきものである。従つて先づ純理論上賣價の決定をなす前に其の製品が如何なる原料、如何程の工賃、幾何の諸經費に依つて生産せられたりやの精確なる原價計算を行はなくてはならぬ。此の計算を行ふ爲めには製造の進行に伴ひ刻々に發生する直接の諸經費は勿論、直接には製造に關係を有せざるも間接に尙關係を有するものは十分明確に計算に採り入るゝ事を要する。註一三而して一製品の實際原價は製造又は加工の進行に伴ひ刻々に分明するの原價計算制度を以て最良のものとなす。然らざるものも鮮くとも製造又は加工の完了直後に於て判明するの方式を選ぶべきである。斯くて製品の原價は製造又は加工完了の時に於て直ちに分明するものであつて、賣價の算定は又從て製造完了の後にあらざれば行はれざる如くに見ゆ

る。されど事の實際に當りては製造又は加工の註文を受くるに當つて先づ引渡價格を約定するの必要を生じ、結局製造又は加工に着手又は完了に先立つて賣價の決定を必要とする場合があり得る。即ち賣價算定の基礎たるべき原價計算が却つて賣價の決定後に行はるゝ結果となるのである。人或は此間の現象を目して原價計算必ずしも賣價算定の基礎たらずとなすあらんもそれは又著しく皮相の見解と稱せざるを得ぬ。

工場に於て採用する原價計算制度は必ずしも唯だ製品製作の結果を金錢的に見積るものたりと見るべきでない。前製品に對して得たる成績は次に生産せらるべき同種未製品に對する一箇完全なる豫算書たり得べきものである事を知らなければならぬ。工場のあらゆる標準化は此の種の豫算書が次製品の實際に完全なる原價計算書たるべき事を裏書するを理想とするのである。又之を裏書する爲めに或は之を實地に徴せんが爲めに前製品に對する原價計算の結果が常に次製品の實價計算の結果と比較研究せらるゝものである。彼の Nominal Cost とか Standard Cost とか稱せらるゝものが Real Cost と相並んで重きをなす所以のものは全く茲に存するのである。見積を以て賣價決定をなす多くの場合にも原價計算は賣價の算定に多くの基礎を與ふるものである。否寧ろ此の場合に於てこそ他の場合以上に原價計算が賣價の算定により一層有力なる基礎を與ふるものと稱することを得る。蓋し製造又は加工の完了の時に其の實際を考量して賣價の決定をなすは、事實が既に明確なる發生をなしたる以上特に原價計算制度の巧妙なる運用を疎たずとも尙或は賣價の算定をなし得べけん。されど事實の未だ發生せざるに先立ち合理的の賣價算定をなさんと欲するとき、前製品に依りて得たる平均的にして正確なる記録計算、或は其の記

録計算により得たる成果を以て基礎とし之に相當の考量を加へ施さなければならぬ。製品の賣價が單に生産原價の上に基礎を置くべしとなすは一切の他の條件を度外に置きたる場合の問題であつて、今若し幾多の條件を加味したる考量をなすときは賣價は必ずしも生産原價の上のみ基礎を置くものでない事を知り得るであらう。従つて原價計算制度は必ずしも賣價の算定に連絡を有するものでなき事を明かにする場合もあり得る。其の適例は

一 一般市況が賣價を左右する場合

二 專賣又は獨占の製造工業

に於て之を見る。而して此等の場合に於て專賣又は獨占の場合とは別として、一般市況が賣價を左右する場合には原價計算は賣價決定の基礎としてよりは原價切下げの經營的資料として前にも述べたる關係を生ずる。此等は賣價算定の基礎としての原價計算なる關係を逆轉して、賣價を原價設定の基礎たらしむる關係を作り出すのである。されど賣價と原價との連楔作用に關し原價計算制度の擧ぐる利益は至大なるものなる事を否定すべくもない。註一五

專賣工業獨占工業は Monopoly type of business として常に利益の最大限を擧げつゝあるのが原則である。此等のものは又精密なる計算を施さざるも尙大體の概算を以て賣價を決定し得、従つて此種製造工業には原價計算制度の必要なきに近き觀がある。併し尙此の場合に於ても精密なる原價計算制度の必要なは否定し得ざる處である。蓋し此種獨占的製造工業に於ても尙其の製品販路の廣からん事を欲し、或は競争工業代用品工業の發生を防ぐ爲めには漸次賣價の切下げをなし行くべきは理の當然に屬する。此の場合に於ては原價の計算を明かにし、且

つ之に基きて無用の経費を慎み價格引下げの餘地を作り、或は價格切下げに依りて尙利益を維持する爲めに経費の切下げに勉むるの資料となすべきである。殊に製造原價を節約し賣價を切下げ其の原價と賣價との關係を明かにすることは、此種事業に於て特に社會的正義の念を高からしむる所以であると考ふべきである。即ち此種工業に於ける原價計算制度は却つて最も尊重せらるべきものである。

註一六

註一三 J. P. Jordan and G. L. Harris, Cost Accounting Principles and Practice, PP. 11-12.

M. Edouard Juhet, Cours de Finance et Comptabilité dans L'Industrie, P. 125.

註一四 A. Calmes, Die Fabrikbuchhaltung, S. 123.

註一五 H. E. Parkes, Cost Accounts for the Metal Industry, P. 4.

註一六 Armstrong, Essentials of Industrial Costing, PP. 25-26.

Atkins, Industrial Costing for Executives, P. 2.

五

工場経営又は管理に於て原料材料製品並に仕懸品の精密なる棚卸を得ることの最も肝要なるは論を俟たない而かも其の實際に於て正確なる棚卸を得ることの容易ならざるは實務に従事するもの、痛切に感得する處である。舊來の工場管理に於ては時々原料倉庫又は製品倉庫につき實査を行つて棚卸をなすの方法を採るけれども、原料及び製品の種類分量が多種多量に上り、或は單に簡數を以て計算する事を得ざる品種につきては如何に其の實査

の困難なるべきや實際に事に當る者の外想像に及ばざる處である。而して其の調査の結果は多く單なる推算又は認定に終り實査を行はざるに然かさるの結果に陥る事は珍らしくない。又舊來の工場管理に於ては棚卸とさへ稱するときは其の棚卸せらるべき各品種につきて分量又は箇數の多寡をさへ明かにせば足るものゝ如き誤解に陥り、其の價格の如きは當然の如くに認定を以て見積をなすに過ぎざるの奇觀をさへ呈したのである。殊に仕懸品の棚卸に於て然りとする。此等は茲に所謂精確なる原價計算制度の存在せざるに由る處が多いのである。製品につきては實地調査に依りて或は其の數量を明かにする事を得ん、されど其の價格に至りては最早此種の實地調査を以て算定する事を許されないのである。結局斯くの如き状態に於ては自然單なる認定又は推算を以て自ら満足せざるを得ないのである。又原料につきて之を論ずるときは、其の原料が他より購入せられたるものなるときは其の棚卸は數量をさへ明かにし得ば之を購入當初の仕入記録に照して價格を明かにする事をも得る。されど工場に於ては他より原料として購入したるものに一定の加工を施して Finished Parts 或は Finished material として貯藏し、必要に應じて之を製品の原料又は材料として使用せんと欲する場合が多い。而して此等半製原料は加工に對する其の原價記録の存せざる限り到底嚴密なる棚卸價格を發見し得らるべくもない。又棚卸は單に製品並に原料につきてのみ之を行ふを以て足れりとするものでなく、工場に於て現に製造工程進行中の所謂仕懸品 (Goods in Process) の棚卸は工場全般に亘る棚卸の中極めて重要なる部分を占むるものである。而して此の仕懸品は之を其の仕懸りの現場に於て實見するに幾多の原料が潰されて製品の形に變化しつゝあるものであつて、而かも未だ完全なる形

態を備へず、單なる見積りに依つて其の數量價格を容易に算定し得べきものでない。此等は刻々に費されつゝある製造又は加工上の諸経費を適當に處理する原價計算制度の存在なしに棚卸をなし得るものにあらざる事は明白である。精確なる原價計算制度を採用する場合には原料材料乃至半製材料仕懸品並に製品につき Perpetual Inventory Method の必ず採用せらるゝあるを觀る。

註一七

原價計算制度と恒久棚卸制度とは常に不離の關係を有し、恒久棚卸の存在なくして原價計算制度のあるなしと稱すべきが今日の原價計算制度である。此の恒久棚卸制度は原料と稱せず製品と云はず倉庫貯藏の品物につきて

註一八

刻々に起る其の庫入庫出の數量と殘高とを明かにし、又其の各々の價格につきても之を明示するものであつて、而かも好く管理せられたる恒久棚卸制度に於ては其の記録並に計算と倉庫に於ける實際とが寸毫の相異を觀ざるを特色とするのである。而して此等は精確なる原價計算制度の存在に依りて始めて可能なるを得べきものである。

工場全般の會計々理に或は又製品の販売をなすに當りて棚卸制度の必要なるべきは敢へて多言を要しない。而して以上の外に工場内部の事情に於て棚卸制度の存在を必要とする理由が別に存する。先づ工場に於て生産計畫の決定をなす場合、換言すれば註文を受け或は註文をまたずして製品の製造に關し分量を豫定し以て工場の現場に作業として之を割當つる場合に、其の製造企劃に缺くべからざる参考を供するの如製品又は仕懸品の棚卸であり、其の製造に着手終了の豫定に参考を供するのが原料材料の棚卸である。製品倉庫に於ける stock の模様は製品の生産企劃に重要な參考資料を供し、原料倉庫の Stores は製造の企劃殊に着手並に進行に伴ひ起るべき原料

註一九

製造工業に於ける原價計算制度の地位

註二〇

庫出並に配給に至大の影響を及ぼすのである。而して原料、製品、仕懸品の嚴格なる價格的棚卸は工場をして銀行其の他の利用を容易ならしめ、金融の爲めの信用設定に唯一無二の貴重なる材料を供することを看過してはならない。而して此の棚卸に關し其の附隨的利益として茲に考慮の内に逸するを得ざる一點か尙存する。そは原料材料乃至は製品に對する警告的價值に屬するものであつて、完全なる棚卸の行はるゝ事なく或は之を行ふも其の利用に特別の注意を拂はざる場合には、原料材料は勿論製品が倉庫に夥しく死藏せられて保險的必要の程度は必更以上になり、時に或は自然に頽廢して利用に耐えざる迄に放任せらるゝ事が存する。又盜難其の他の損失に陥りたるを検出し得ざる場合も存し得る。正確なる棚卸と其の利用とは此等の損失を未然に防止する事を得るものであるが、恒久棚卸制度と原價制度との關係は斯くて甚だ密接なるを加へ、此の兩者の相互關係は製造工業の經營乃至管理に數多の利益を齎すものである。

註一七 拙著商業簿記要論 第二一八頁—第二二七頁

註一八 Lawrence, Cost Accounting, P. 3.

註一九 拙著工場管理概論 第一九三頁—第一九七頁

註二〇 拙著工場管理概論 第三四五頁—第三五八頁